

■ 震災被害調査と 第20回PCシンポジウム函館



西山 峰 広*

東日本大震災で多くの方々がお亡くなりになられたことに対し、お悔やみ申し上げますとともに、被災された方々をはじめ避難生活を余儀なくされておられます皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

地震によって被害が発生した後は、学会調査団などが被災地域に赴き、被害状況を調査・記録します。新聞記者やカメラマンが取材地で、取材を優先するか、人助けを優先するかで悩むように、調査を行う際には、「このような調査活動は、被災者を救済することになっているのだろうか」と自問することがあります。被災者の方々から「何をしに来たのか」「私らが困っているのに助けに来てくれたのではないのか」と非難されることもあります。逆に、壊れたわが家をよく見てほしいと、家の中まで案内され、帰り際には、がんばって調査してくださいと逆に励まされたこともあります。行方不明者の捜索やけがをされた方の治療、救援物資の運搬や瓦礫の片付けなど被災地に直接援助となるような仕事のために被災地に入るのであればよいのですが、被災の惨状を横目に、構造物の被害状況を調査・記録したり、写真を撮ったりすることは非常に気が引けます。しかし、将来同様の被害を出さないために、構造物の設計や施工を見直すための貴重な資料となるものと信じています。

このような理由から被災地に入るのは、ある程度事態が落ち着いてからになるのが普通です。しかし、あまり遅くなると、すべて片付けが済んで被害の痕跡が残っていないということもあります。1日も早い復興を願う一方、勝手な言い方かもしれませんが、貴重な資料が消え去る前に記録にとどめることも技術者や研究者の仕事です。

構造物の設計と施工は、大きな地震が起こり、被害が生じるたびに見直されてきました。たとえば1978

年宮城県沖地震、1995年兵庫県南部地震など大地震後には、多角的な調査や検討が行われ、現行の設計や施工に問題がないのか、あるとすればどのように改善すべきなのか議論され、法令や規準・指針類に反映されてきました。

東日本大震災においても、プレストレストコンクリート技術協会では、調査委員会を組織し、プレストレストコンクリート構造物の被害状況調査とその記録を行います。1995年兵庫県南部地震後にもPC構造物の調査を行いました。被害を受けた建築物はかざられていましたが、その調査結果は報告書として残されています。このような調査結果、被害分析結果に基づき、PC構造物の設計と施工および管理のさらなる向上を目指します。被災地の方々にはご迷惑をおかけしないようにいたしますので、ご理解とご協力いただければと思います。

東北と関東での被害状況が報道の中心となっておりますが、北海道函館市でも津波によっておひとりが亡くなり、けがをされた方が1名、床上浸水85棟、床下浸水52棟、一部損壊3棟という被害が報告されています。その函館で、「第20回プレストレストコンクリートの発展に関するシンポジウム」が10月13日と14日に開催されます。特別講演講師おふたりのうちおひとりには、東京大学の磯部雅彦先生をお迎えし、「津波に対する今後の戦略」(仮題)についてお話をうかがうことになっています。シンポジウムでは、最新の技術開発と研究成果の発表とともに、参加者から東日本大震災に対する技術者あるいは研究者としての反省の弁と将来へ向けての抱負が聞かれるものと思います。是非この機会を捉えて、今後の防災対策、構造物の設計・施工のさらなる改善、技術者・研究者の果たすべき役割などをご議論いただければと思います。

* Minehiro NISHIYAMA：京都大学大学院工学研究科教授・本協会理事
第20回プレストレストコンクリートの発展に関するシンポジウム（函館）実行委員長